
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

新型コロナ感染拡大下における芸能に関する学際的研究

第4回研究会（2022年4月24日開催）報告

日時：2022年4月24日

場所：AA研304とオンラインのハイブリッド開催

内容：冒頭で代表者の吉田より、研究グループの活動状況や今後の予定について報告した。その後、コロナ状況下における芸能の上演や伝承におけるオンラインの活動について、吉田および竹村嘉晃氏からの研究発表がおこなわれた。吉田は、新型コロナパンデミックの初期にインドネシア・バリ島のプロやアマチュアの芸能者達がオンラインで発表した映像作品の分析、そして竹村はシンガポールにおけるインド舞踊をめぐる、本国インドも巻き込む形で展開しているレッスンのオンライン化の状況とその舞踊への影響についての報告を行った。各報告の後に参加者全員との質疑応答を行ったほか、最後に全体討論をおこなった。パンデミックが始まり2年がたち、日本と同様、東南アジア地域でも部分的には対面の活動が復活してきている。そのような現在において、コロナ状況をきっかけに行われたオンラインでの上演や、観客との関係性の構築、芸の伝承、新たな表現の追求といった事柄が、どのように続いてゆくのか、いかないのか。またこうした芸能の経験が、パンデミックから立ち直ろうとする社会においてどのような役割を果たすのか。こうした問いの重要性が増しているということも確認された。各報告の概要は下記の要旨の通りである。

（以上文責 吉田ゆか子）

報告1

「コロナ状況初期におけるバリ芸能—ステイホームの創造性と即興」

吉田ゆか子

従来、バリの芸能は人々の危機に際して重要な役割を担ってきた。安寧を祈る奉納舞踊や神格の力添えを得る憑依の舞、疫病退散のために開催されるご神体の仮面の練り歩きや舞、

そして人々の苦境を笑い飛ばすコメディ劇は、歴史的にも地震や疫病やテロといった危機に際して盛んに上演され、窮地にあるバリの人々を支えた。しかし、他者と距離をとり、家にこもることが推奨された今回のパンデミックにおいては、そうした従来の芸能の活性化は、(発表者がオンライン調査で把握した限り) 少なくとも表立っては見られなかった。本発表ではパンデミックの初期(2020年3月末～6月末頃)に注目する。この時期、人々は未知のウイルスに恐怖し、生活様式の変更に迫られ、また観光客激減に伴う失業に右往左往していた。この困難の時期に、有名無名のパフォーマーたちがオンライン上に数々の映像作品を発表した。本発表ではそれらの中から、注目を集めたものや、平時とは異なる特徴を見せるものを紹介し、それが生まれた背景を考察しながら、芸能者たちが即興的にこのパンデミックに応答し、社会における役割を果たそうとしていたことを示した。発表後、オンライン化が芸能にもたらす事柄についての議論が多くなされた。オンライン配信に伴って生じる著作権の問題、いつまでも上演がネット上に残ることの影響、無料配信がオンライン作品は多くの場合無料かつ期間を区切らずに公開されているが、そのことによって、コロナ終息後の視聴のスタイルも変化するのか、登場はによって、従来型の視聴スタイルによって、

報告2

「オンラインで学ぶ、語る、共有する——コロナ禍のシンガポールにおけるインド系芸能団体の活動と生徒とのかかわりあい」

竹村嘉晃

本発表は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが続く中で、多民族国家のシンガポールで受け継がれているインドの舞踊文化を事例に、コロナ禍における舞踊の教授や公演活動の実態をメディアとのかかわりに注目して考察しようとする試論である。その背景にあるのは、芸能とメディアとの接合、とくに今日的なメディア環境やテクノロジーの発展が芸能の表象や情報だけでなく、伝承や上演そのものも規定しているという問題意識によるものである。

本発表では、第一にシンガポールにおけるインドの舞踊文化の伝播・発展の歴史とコロナ感染状況などを概観した。次にインドの音楽・舞踊の教授法に関して、コロナ禍以前からオンライン教授法が既に発展していたことを指摘し、その要因となった北米におけるインド系移民コミュニティの拡大と芸能公演の増加、インド人実演家のグローバルな活動実態、さらにはインド系ディアスポラの子供たちが本国の舞踊界へ与える影響などを考察した。一方、シンガポールの文脈では、政府支援のもとでコロナ禍に開催されたオンラインの芸術フェスティバルの内容を詳述し、その反響を国内外の文脈から考察した。またコロナ禍で実演家たちが自主的に開催したオンラインのトーク・セッションに着目し、舞踊学

習者たちが実技習得だけでなく、インドの舞踊文化に関する座学を学んだり芸術団体の創設者たちの経験を共有したりする機会がもたらされたことを明らかにした。

質疑応答では、政府主導の支援策に関する日本との比較やオンライン・レッスンのメリット／デメリットなどが議論された。本発表を通じた今後の課題としては、オンライン教授など今日のメディア環境が舞踊家・学習者たちの意識や学習・実践活動、あるいは世代間にいかなる影響を及ぼしているのか、またアフター・コロナがスタートした上演芸術シーンにおいて、実演家たちが感じる違和感や喪失感とはどんなものなのかなどを現地調査から明らかにする必要があると明確となった。